

古事記読書会

「弥栄(いやさか)の会」

2021年度第6・7回 報告書

開催日：第6回：2021年9月25日(土)

9：30～11：30

第7回：2021年10月23日(土)

9：30～11：30

開催場所：Zoomにて開催

参加者：第6回：7名(正会員)

第7回：6名(正会員)

内容：

(1) 参加者自己紹介

(2) 朗読

阿部國治著・栗山要編「第七集 八俣遠呂智(やまたのおろち)」第4～8章を、Zoomを用いて順番に輪読

(3) あらすじ

第一章 かむつどい

天照大御神のお籠りによる禍いが続き困り果てた八百万の神は、それまで自らの受持ちに熱心なあまりお互いを尊重していなかったことに気付く。天照大御神に天岩屋戸から出て頂くために、八百万の神が集まり(神集い)、真心をもって相談(神はかり)しなければならぬとの結論に達する。

第二章 おもいかね

相談(神はかり)を進めるにあたり主宰者が必要となったが八百万の神はそれぞれの受持ちがあり誰も主宰者になろうとしなかった。そこで、特に受持ちのない思兼神(おもいかねのかみ)が主宰者を引き受ける。

第三章 とこよのながなきどり

思兼神は御霊鎮めをして「常世の長鳴鳥を集めて天岩屋戸の前で鳴かせる」ことを、まずはじめに八百万の神に提案する。

第四章 かがみ

次に思兼神は「天照大御神を慕う気持ちを形で

示す」ことを提案し、日の形が相応しい、として丸い鏡を作ることを八百万の神に提案する。道具や材料に念を入れて見事な鏡が出来上がる。

第五章 たまつくりのこころ

次に思兼神は「天照大御神が使命を忘れないように常に奉持している」「八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠」をかたどった珠を作る」ことを八百万の神に提案する。美事な珠が完成し八百万の神は大いに喜ぶ。

第六章 うらへ

次に思兼神は「五百津真賢木(いほつまさかき)を作りそれを象徴として『ひのくに』の全体としての正しい姿・型を忘れない縁(よすが)にする」ことを提案する。さらにこれを作ることの可否について神意を問うために占合(うらへ)を執り行った結果、良い、との神意が現れる。

第七章 いほつまさかき

八百万神が見守る中、布刀玉命は、天の香山(かぐやま)の五百津真賢木を掘り起こし、天岩屋戸の前に立て、鏡と珠と丹寸手(にぎて)を懸けて供えた。これを見た天児屋命は、八百万神が本来の面目に立ち返られたことの事実と今後について声高らかに「のりと」を唱えることを決心する。

第八章 やまたのおろち

須佐之男命は現し国(うつしくに)に天下り、かつて自分が荒らした地を見て悔いとともに自らの心の変化を認識し国造りの仕事に励むことを決意する。そこへ八俣遠呂智(やまたのおろち)に娘を食われることに怯える老夫婦が現れる。須佐之男命は八俣遠呂智を酒に酔わせ十拳剣で退治する。不思議なことに八俣遠呂智の尾の中に鋭利な太刀が入っていた。須佐之男命は、こうして自分が、たとえ一人の娘のためであっても、命を賭けて八俣遠呂智を退治する気持ちになったのは、伊邪那岐命様と、お姉上・天照大御神様のお導きのお陰であると考え、八俣遠呂智退治をご報告すると同時に、この『都牟刈太刀(つむかりのたち)』を高天原の天照大御神にご献上になった。

天照大御神は「須佐之男命も八俣遠呂智を退治するようになったか。これで弟の仕事も新しい進

み方の第一歩が始まった」と喜び、『都牟刈太刀』をご受納になった。『都牟刈太刀』は後に『草那芸剣(くさなぎのつるぎ)』と呼ばれる。三種の神器の一つ。

(4) 読後感

○ついに読破。これまでも何度か一人で読んできたが皆で輪読することで理解が深まった

○最近職場が移転した際、神主さんの祝詞を聞き古事記と重ね心に響いた。縁を感じた

○新釈古事記伝は抜粋版で順番も変えてある。改心した須佐之男命が大国主命の師になる、という冒頭に繋がり、無限のスターウォーズのようだし、刀が出てきて草薙の剣となったという所に、物語がさらに続いていくのではと感じた

○天照大御神が天岩屋戸から出る所が省かれており、物語を理解するのではなく、古事記から様々な教えを学びなさい、という書のように感じる

○天照大御神が出たところが描かれず不完全燃焼だが、八咫遠呂智の退治で終わるところは清々しい。以前石見神楽を見た記憶が蘇った

○五百津真賢木が高天原・現し国・黄泉国三界の円満・調和を現わしており、宗教と科学は一致すべき、中庸を取るべき、という教えに共感した

○科学と宗教は反しない、という所に、科学は万能ではない、奢るべからずという教えを感じる

○「物を真心によって使いなさい」とは、技術を追求するあまり技術に溺れてはダメとの教えである。須佐之男命がかつて自分もオロチのようだったと反省した場面でもこのことに気付いたはず

○思兼神の話し合う、議論し尽くすということが大事。理屈じゃない所も大事にすることが大事

○安全祈願や神棚は工事に関わりがあるが「人事を尽くして天命を待つ」ことが大切。安全祈願祭には対立関係の人が和解するという意味もある

○着工とは「土地に入る」ことなので、氏神様に相談しながら進めることが大切なのでは

○今後祝詞を聞く時にキーワードを参考にしたい

○漢字が面白く美しさに気付いた。「みごと」を「見事」ではなく「美事」と書く等

○天岩屋戸は高千穂にあるらしい

(5) 参考：第一章〜第13章あらすじ(文責：小林)

「受け日」(うけひ…第一章〜第四章)

第一章 なきいさち

伊邪那岐大御神の子…天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三姉弟。父が須佐之男命に「ことよさし」として現世の国造りの使命(国土開拓)を命ずる。須佐之男命は移動中の困難に遭い、荒れ果てた現世を見て使命の尊さを忘れ、姉兄を羨み「なきいさち」状態となる。そこへ父伊邪那岐大御神が現れて叱り「神やらい」として須佐之男命を放する。

第二章 まいのぼり

須佐之男命は反省し高天原にいる天照大御神を訪ねることを父に提案する。父は天照大御神の元で修行することに同意し立派な「まいのぼり」をするよう命ずる。須佐之男命は「みたましずめ」をして立派なまいのぼりについて覚り、現世のあらゆる穢れを背負って正々堂々と高天原にまいのぼりっていく。

第三章 いつのをたけび

天照大御神は須佐之男命の反省を大いに喜び、ひかりの神としての威厳を示し弟の心を完全な状態に整えるために男神の姿(Ⅱいつのをたけびの準備)で迎える。須佐之男命はそれを受け止めてさらに反省する。天照大御神の光を受け須佐之男命に怪しき心が無くなり清明心になっていることがわかるが、天照大御神はその証をするよう命ずる。

第四章 うけひ

須佐之男命は天照大御神の「おひかり」に包まれ御魂鎮めを続け、無色透明になりただ「おひかり」だけになる(Ⅱうけひ)。天照大御神はさらに第二の証を立てるよう命じ、須佐之男命は御子を生むことを提案する。

「勝佐備」(かちさび・第五章～第十章)

第5章 あめのやすかは

須佐之男命は受け日の過程で見事なひかりの流れ(「あめのやすかは」)を発見したことを天照大御神に伝え、天照大御神はそれが須佐之男命に見えたことを大いに喜びそこで一大事業(「みこうみ」)をすることを提案する。※あめのやすのかは：課題を背負っているものの「いのち」本質

第6章 あめのまなゐ

須佐之男命は「受持ち」である現世の開拓を急ぎたいと考えるが、それに必要なものを天照大御神から問われ、「手」「太刀」(「十拳劍」と答える。「なきいさち」の頃は「殺太刀」となっていたがこれを「生太刀」とするため、天照大御神は「あめのやすのかは」の中に入る。その中の「あめのまなゐ」で禊をし殺太刀は生太刀となる。

第7章 いふき

天照大御神は「あめのまなゐ」において生太刀に息を吹きかけ(「いふき」)三人の姫御子が生まれる(「みこうみ」)。

第8章 やさかのまがたまのいほつのみすまるのたま

須佐之男命も「みこうみ」をするため、十拳劍に代わるものを天照大御神に求め、天照大御神は「八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠」を差し出す。須佐之男命はそれを受取り、「あめのまなゐ」において「いふき」を行い五人の彦御子が生まれる(「みこうみ」)。

第9章 みこのりわけ

三人の姫御子は、須佐之男命の生太刀を「ものだね」として生まれたので須佐之男命の受持ちの協力者であり、五人の彦御子は、天照大御神の珠を「ものだね」として生まれたので天照大御神の受持ちの協力者である。八柱の御子達はそれぞれ自分の名前の意味と受持ちとの関係を申し述べる。

第10章 かちさび

須佐之男命は自らの受持ちである現世の開拓に参考となる高天原の調査と勉強を始める。農業等の修行と研究に熱心に励むあまり自分の考えを試すようになり高天原の神々と衝突してしまう。

「天岩屋戸」(あまのいわやと：第十一章～第十三章)

第11章 のりなおし

高天原での須佐之男命の行為について神々から天照大御神に苦情が殺到する。天照大御神は須佐之男命をとがめず、神々に対して、須佐之男命が自らの受持ちに熱心なあまり他が見えなくなっている状態(「勝ちさび」)であると伝え、須佐之男命の気持ちと行為に根拠を与える(「のりなおし」)。

第12章 みかしくみ

須佐之男命は研究のため斑馬の皮を逆剥ぎにしさらに神々の反感を買う。天照大御神から命じられ斑馬を持参した須佐之男命は、天照大御神が機織りの最中で入り口が狭かったことから、御殿の屋根を壊して斑馬を墮とし入れる。天照大御神に仕える機織女は神に奉る織物が斑馬墮し入れによって穢されたことを嘆き自殺する。天照大御神は責任を感じ天つ神に長い祈りを捧げる(「みかしくみ」)。

第13章 おこもり

みかしくみの後、天照大御神は八百万の神と須佐之男命を呼び、機織女の死に至るまでの出来事の責任はすべて自分にあるため、天岩屋戸に籠ることを伝える。天照大御神の「おこもり」によって、闇夜の状況が続くことと多くの災いが起こる。

【次回予定】

2021年11月27日(土) 9:30～11:30

※次回もZoomにより、再び最初の「袋背負いの心(ふくろしよいのこころ)」から味わう予定

■参加申込方法

開催日前日までに、下記必要事項を記入の上、
メールにてお申し込みください。

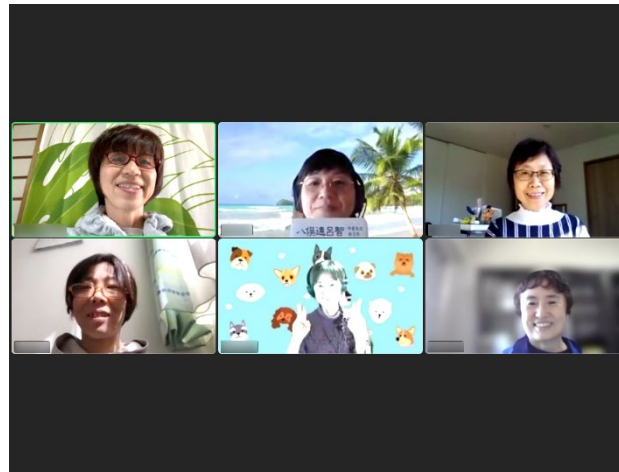
【必要事項】 所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

【申込先】

reading-circle@womencivilengineers.com

(担当：小林)

以上



読後感で土木屋談義に盛り上がった後の記念撮影



参加者が石見銀山へ観光に行った際に、鑑賞・撮影した
石見神楽の一場面（ヤマタノオロチの登場シーン）